

て四方眺望すれば多ならぬ風景記にいとまあらず、ちかく見わたせば、廻向院念佛のこゑいつもたえせず、それより見やれば、北のかたに駒形堂、淺草觀音堂、又は牛の御前、隅田川まのあたりに見え、遠くは房州、筑波山ほのかにのぞみ、かぎりなき絶景也、或は諸國の商船多く入船有、出る船あり、三月の比、秋のすゑまでは、遊船夥敷、此ほとりにあつまり、夏月の炎天には、ひたすら川面船になりて、流星玉火を帆にあげ、笛太鼓を楫になして、うたひどよめき、一輩の行所をほしひま、にして、廻向院、駒形堂に上るも、有方頃の茫然たるを凌て、龜井戸、木母寺などに、行も有、誠にかくれなき江城の歌吹海也、

〔國花萬葉記武藏下〕兩國大橋三大橋之內淺草川に有、明曆年中に草創の橋也、武藏國と下總國に渡されたる橋なれば、兩國橋と稱す、是關東第一の大橋なり、真中に番所をすへて、夜陰の非常をいましむ、此大橋の上より四方の眺望な、めならず、景興一々、玄るしがたし、

〔遊囊贖記三〕兩國橋ハ永代大橋、東橋ヲ併テ大川ノ四大橋ト稱スベシ、春夏ノ頃扁舟ヲ泛テ、三股ヲ過テ、鑿川ニ入テ、天神羅漢ヲ巡詣シ、或ハ隅田牛島ノ邊ニ溯洄スルモ亦一快ナラズヤ、

玉露叢、明曆三年略中武藏ト下總トノ境、淺草川ノ末、無緣寺ノ前ニ新ニ長橋ヲ掛ラル、長サ九十六間、兩國橋トイフ、年月ヲ經テ、万治三年ニ成就ス、略中

一説、兩國橋ハ寛文元年、初テ掛ラル、奉行ハ芝山權左衛門、坪内藤右衛門、其後天和元年、掛替御手傳眞田伊賀守、奉行松平采女、舟越左門矢ノ倉脇ニ假橋ヲ設ク、今爰ヲ元兩國トイフ、然ルニ掛替續用ナラザリシカバ、各其罰ヲ行ハル、十五年ノ間、假橋ヲ用ヒラル、元祿九年三月、町奉行川口攝津守、能勢出雲守、承テ經營シ、九月落成セリトイフ、

〔江戸砂子〕兩國橋 淺草川にわたす、長凡九十六間、萬治年中にはじめてかゝるはじめ、大橋といひ、後兩國橋といふよし、此橋古名大橋といひしゆ